

保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅰ）

—短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して—

石 山 貴 章（九州ルーテル学院大学）

安 部 孝（埼玉純真短期大学）

Current Status and Problems with Practical Training at Welfare Facilities for Nursery
Teacher Trainees in Junior Colleges (1)
—Advance preparations and guidance—

Takaaki Ishiyama (Kyushu Lutheran College)

Takashi Abe (Saitama Junshin Junior College)

The process of advanced preparation and guidance, as well as the future potential of practical training at welfare facilities for teacher trainees in junior colleges was analyzed. Fieldwork was conducted to focus on similarities between actual childcare situations and lessons in college. The results indicated that it is necessary for these students to learn the basic knowledge and skills needed for the practical training from the start of college. Moreover, it was indicated that colleges have to offer educational opportunities to facilitate understanding between students and welfare facilities about the problems faced by such facilities. In the future, empirical studies should be conducted on practical training at welfare facilities, so that such training programs would be more useful for students, schools and facilities, as well as for facilitating continuous contact between schools and facilities.

Key Words: junior college, practical training at welfare facilities, guidance process, common knowledge

本研究は、保育士養成機関として位置している短期大学の保育実習のひとつ「施設実習」に焦点をあて、実習に至るまでの事前取組と指導についての過程を検討した。また、施設現場と保育士養成機関との相互接点を掘り起こすためにフィールドワークで得られたデータを基にしながら、今後の「施設実習」のあり方についての課題と手立てを探った。その結果、養成校では、入学初期から、さまざまな講義において、実習の動機づけに必要な基礎的知識、技能を習得させていくとともに、施設が抱えている問題について、学生と現場の共通理解を図っていくための情報や機会を提供していかななくてはならないことが明らかとなった。今後も養成機関は、施設現場との連

携を継続的に行いながら、お互いにとって有益となる「施設実習」のあり方について実証的な研究を積み重ねていかねばならない。

キーワード： 短期大学 施設実習 指導プロセス 共通理解

1. 問題と目的

保育士養成機関においては、保育士資格や幼稚園、小学校教諭などの資格取得を目指し、日々、学生指導・支援が行われている。将来、幼稚園や保育所、小学校などで子どもたちと関わる仕事をするために、多くの学生が乳幼児保育・教育関連のカリキュラムを学んでおり、その過程の中で、各園や施設、学校などで保育・教育実習を行うことが必須条件となっている。

本研究では、このうち「施設実習」を取り上げながら、短期大学での取り組みの現状を明らかにし、今後の実習のあり方について課題を見出していくことをねらいとした。保育実習は、保育所のみの実習を行えばよいとの認識を入学当初の学生は多くもっており、入学後、初めて保育士資格を取得するためには、保育所実習以外にプラスして「施設実習」を行わなくてはならないことを知る者が多い。これは、保育士資格取得のプロセスが十分に伝達されていないことと、学生自身が、自分の将来を見据えた計画ができていないなどの理由が想定される。高校訪問や講演、入試説明などで各学校を訪問するたびに、このようなシステムの内容を説明するが、まだ全体には浸透していない現状がある。

このため、短期大学入学後、早期から施設に関する情報提供及び実習に必要とされる内容について、実践現場を想定した具体性のある講義を行いながら、約1年間をかけて施設実習に向けた事前学習を行うこととなる。「施設実習」といっても、乳児院や児童養護施設などの児童福祉施設のほか、障害児者施設など、その範囲は広く、施設養護の全般的な内容や実践技術・方法を学んでいく必要性が出てくる。保育士養成機関では、実習に関する指導・支援のあり方で共通の課題をもっており、「事前学習の内容」「実習時期」「学生の実習に対する姿勢」「過密なカリキュラム」「個々の学生に応じた個別対応」「施設側からの要求」など、数多くの課題を受けながら日々の実践や研究がなされている。

山口(2007)は、実習前後における短大生の心的発達を検討し、実習前と比較して、実習後は、「自己効力感」と「いきがい感」に有意差が認められることを確認した上で、「施設実習」の経験が、学生の心的発達に影響を与えていることを報告している。また、実習プログラムの検討を行うために、「施設実習」過程における学生のモチベーションを、シートと実習日誌記録を使って分析し、実習期間中の学生におけるモチベーション要因として、「子どもとの関わり」「時間の経過」「実習プログラム」を挙げた研究(川島・川本・藤之原・峰島, 2007)もある。これらは、いずれも、学生の内的要因に着目した研究であり、実習に対する動機づけや意識の理解などを通じながら指導を行うことの必要性を述べている。

一方、実習の事前学習に焦点をあてた研究は少ないが、藤・木村(2008)らは、施設実習事前指導で活用していくために、学生の実習前の不安やストレスをEQとCB-Eによって把握し、それを指導に活かそうとした。このように、学生の内的側面の検討に加え、事前指導とのつながりを考えていくことで、より実習の質を高めていくための手立てが明らかになってくると思われる。

よって、今回の報告では、短期大学における「施設実習」の事前指導のあり方について、一連の実習事前指導の過程を明らかにしながら、加えて、学生と実習施設で得られた実証的なデータを用いて、今後の「施設実習」事前指導に、どのような取組や指導の観点が必要なのかを検証していくことを目的とした。

2. 方 法

1) 対 象

短期大学のこども学科（乳幼児保育コース）における「施設実習」事前指導のカリキュラムを基に分析を行った。また、事前指導を受けた女子学生1年生155名（2006年度入学生）のアンケートの結果をまとめ、施設実習前の意識について検討を加えた。そして、実習施設16か所の施設実習担当の先生に対してインタビューを実施し、施設実習の事前指導として、養成機関や学生に求められているものを浮上させていった。なお、今回対象とした短期大学では、保育士資格取得に必要とされる10日間の「施設実習」を1年次の11月～3月の期間に実施している。

2) 方 法

短期大学での施設実習事前学習の取組を通して、その現状と課題を批判的に分析していく。具体的には、施設実習の事前学習の流れを提示しながら、一つ一つの課題を明らかにしていき、今後の指導のあり方と課題について検討していく。また、学生と実習施設に対するアンケート及びインタビューを通じて、指導内容や方法について検討した。

3. 結 果

3-1 短期大学における施設実習までの流れ

将来、保育士を目指している学生に対して、「施設実習」は、入学後、最初の実習経験となる。よって、施設に関する基本的な知識や動向を理解させていくとともに、実習直前まで、学生の将来像を見据えた指導が必要となってくる。「施設実習」までの流れを図1に示した。施設種は大きく、乳児院、児童養護施設、障害児者施設と分かれているが、実習協力施設として大学側が依頼している施設は、障害児者施設（知的障害）が多いのが現状である。この理由としては、施設数の多さはもとより、施設側の実習受け入れに対する門戸の広さにもある。乳児院や児童養護施設は、障害児者施設と比較して、現場の状況やプライベートな問題、複雑な家庭環境などがあり、実習学生に対して、十分な指導ができない、学生と利用者との関係調整、実習期間や時期の問題などが存在している。

なお、学生に対しては、入学後すぐに、施設実習を見通した指導が行われ、各施設の現状や子どもたち、利用者の状態、支援のあり方などについて講義や演習を中心に意識づけが図られている。

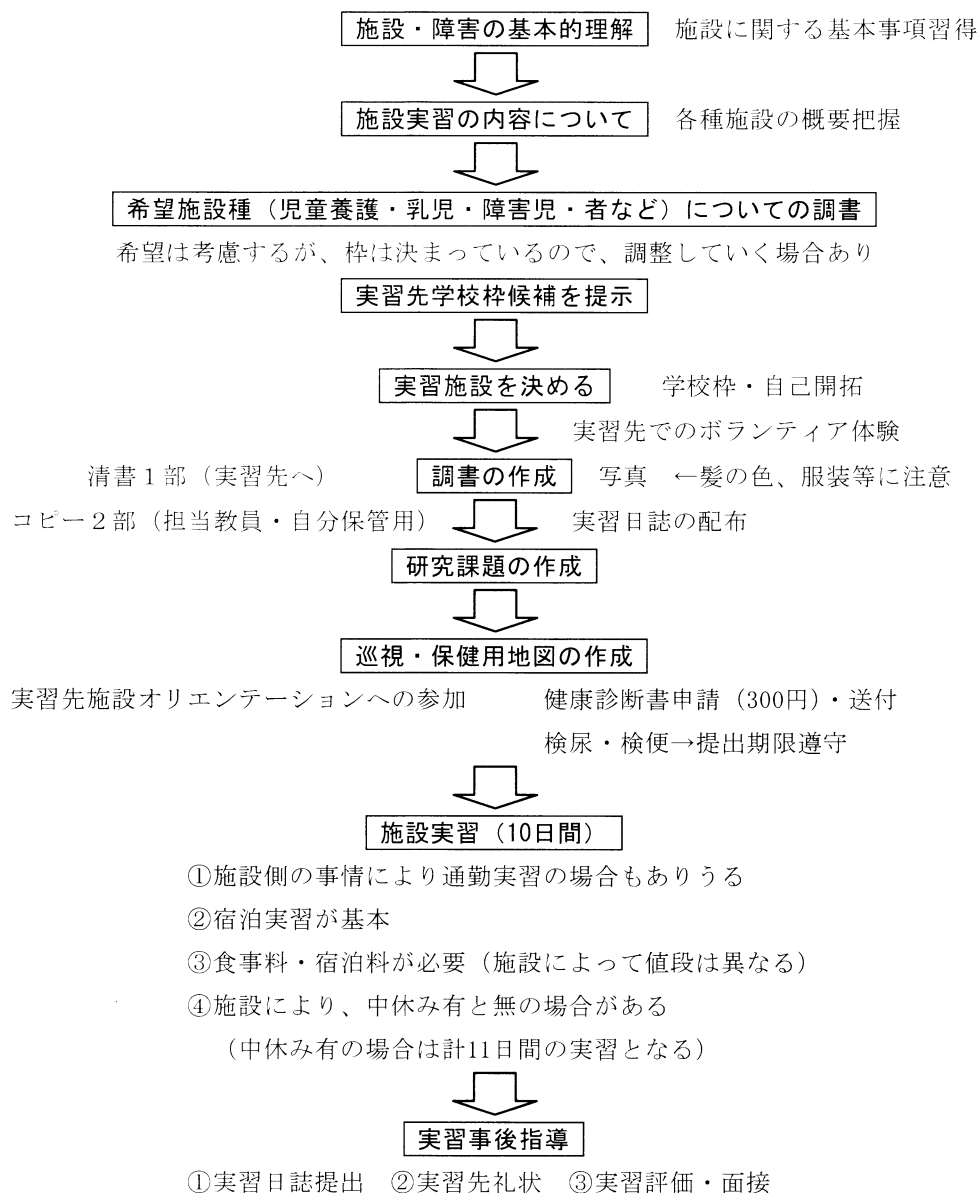


図1 施設実習の流れ

実習は、上記の流れで実施されているが、提出書類の不備があったり、提出が遅れたりする学生も多く、まずは、基本的なルールや規則に則った活動をしっかりと伝えていくことが必要である。また、分からないことがあっても、友人や先生に相談することもなく、一人で問題を抱えたまま、活動が先に進まない学生もいる。早期に、一人ひとりの課題を見出し、個別に対応していく時間や体制をとっていく必要がある。

3.2 施設種別学生希望状況

学生に対して、毎年5月に実習先希望調査を行っている。実習先希望の状況は表1の通りである。なお、学校枠は年度により若干の変動はあるが、実習希望学生数よりも少ないのが現状である。これは、教員による新規施設開拓の他、県外学生が地元で実習を依頼する場合や、学生自らが施設の自己開拓を行って実習先を決めていることで埋められている。

表1 実習先希望調書結果（N=155）

希望施設種	希望者の割合（人数）	学校枠（実習生受け入れ可人数）
乳 児 院	34.2%（53人）	8施設（15人）
児 童 養 護 施 設	44.5%（69人）	21施設（47人）
障 害 児 者 施 設	11.0%（17人）	35施設（73人）
どこでもやれる	7.7%（12人）	—
そ の 他	2.6%（4人）	2施設（6人）
合 計	100%（155人）	66施設（141人）

5月の時点では、まだ十分な各施設の理解や利用者の状態把握などがいないため、「赤ちゃんに関わりたい」、「赤ちゃんがかわいい」「大人よりも子どもたちとの関わりがしたい」「家庭環境に何らかの問題を抱えている子どもたちの支援がしたい」「障害児者との関わりは経験がなく不安」などの声があり、実習先を選定していく上では動機や問題意識の面で弱さがある。特に、障害児者に関しては、これまでにボランティアや何らかの経験があるかないかで意識面で大きな差が出てくる。実際には、「なぜ、この施設種を希望したのか」というレポートの内容と個人面談などによって、最終的な実習先を決定していく。また、難しい問題として、実習は宿泊実習が基本であるが、施設の受け入れ体制によって、通所となってくる場合である。通所になると、学生の住所や免許取得の有無、公共交通機関を利用しての実習が可能かどうかなどの条件絞込みが必要となってくる。場合によっては、通勤に1時間以上を要する学生も出てきている。出来る限り、学生の目的や要望に応えながら実習施設を選定していくことが望ましいと考えられるが、実際は、教員が学生をリードする形で施設が決定されている。

表2 施設実習希望調査票

現 住 所	〒	最寄駅（ ）
帰省先(自宅外のみ)	〒	最寄駅（ ）
これまでに行ったボランティア (高校時代から現在までのもの)	① ② ③ ④	
希望施設の種別 第一希望には◎ 第二希望には○	*乳児院 *児童養護施設 *知的障害児・者施設 *肢体不自由児・者施設 *重症心身障害児・者施設 *施設の種別は特に問わない（どこでもやれる）	
希望理由 (具体的に記入)	*自宅から近いというのは理由にはならない。宿泊が基本であるから、遠方の施設でも実習は可能。	
自己開拓の希望	*自宅外の学生で、実習を地元で行いたい方については、自分で地元の施設を開拓し、交渉してもらう。ただし、交渉前に、施設実習担当者に相談すること。 *自己開拓を希望します。（ ）県	
自家用車の使用 どちらかに○を入れて下さい。	*通学実習になった場合、車を運転して実習先に通えるかどうか。 *車を運転、利用できる *車を運転、利用はできない	

*施設実習は10日間の宿泊実習が基本。

*施設実習は希望通りにはいかないことを承知しておくこと。

*施設実習の基本は宿泊実習となります。ただし施設の要望や状況により通いもある。

3.3 実習前の意識調査

学生に対して、「実習前に期待していること」及び「不安に感じていること」に関するアンケートを講義時間内の一部（20分）を利用して実施した。これにより、指導者側が当たり前と知っていることに関する不安感や想定できなかった学生の問題意識を把握することができる。この結果を指導にフィードバックしながら、学生と教員の共通理解を図っている。また、アンケート内容により、個別に対応していかなくてはならない学生を見出して指導も行う。

表3 施設実習について 学生アンケート結果（一部抜粋）

I 実習前に期待していること
施設での子どもたちの生活を知ること
知的障害をもつ子どもとの関わり方を学ぶこと
子どもたちの発達を知ること
将来は児童養護施設で働きたいので、その様子を詳しく知りたい
施設的环境や雰囲気をつかみたい
自分が抱いている施設のイメージを変えたい
虐待をうけた子どもたちとの関わり方を学ぶこと
自分の生活を見直すきっかけになりそう
職員の行動やケアの方法を学ぶこと
自分の精神面を強くしたい
施設の先生方から支援の姿勢を学びたい
II 実習前に不安に思っていること
どのように接していけばよいか不安だ
自分自身の精神面・体力面
年配の利用者の方々とうまく関わることができるか
相手の言っていることが理解できなかった時にどうするか
嫌なことをされたらどうすればいいか？「うでを強くつかまれたりしたら」
失敗したらどうしよう（悪い評価を受けたらどうしよう）
自分自身、実習中に熱（微熱）が出たらどうしたらよいか
発達段階についてあまり知らないことに対する不安
職員への声かけ・・・（自分がトイレに行くときなど）
入浴・排泄・洗濯・食事の支援について
利用者の方が興奮したり、暴れたりしたら…
他大学の学生との関係
III その他（実習に関して）
服装は学校のジャージでもよいですか？
食べ物の好き嫌いがあるのですが…
何か、子どもたちと遊べることを準備しておく必要があるか？
ピアノが弾けなきゃだめですか
化粧はしてもいいのか…
睡眠時間は十分にとれるのか…
中休みがある場合、どう過ごせばいいか
夜、外出できるのか

実習前の期待としては、「関わり方を学ぶ」「虐待問題を知る」「子どもの発達を学ぶ」「先生方の指導法を知る」「施設の現状を把握する」などに関連する項目が多かった。実習前の不安としては、「接し方」「先生との関係」「仕事内容」「精神面」「宿泊」「評価」などの項目が挙げられた。その他として、「服装」「化粧」「教材準備」「外出」など、常識的な問題が多い。私たちにとっては、当たり前と思われる項目が多いが、学生にとっては、これらが不安感につながっており、一つ一つに対して、「なぜ、そうしなくてはならないか」ということを意識させながら指導していくことが必要となってくる。

3.4 実習生調書・実習計画書について

実習生調書については、講義の中で詳細に記入説明を行い、下書きと本書きの2回をチェックして最終提出となる。提出期限を過ぎたものや不備が多いものについては原則受け取らない。「調書は実習生の顔である」ことを常に意識させ、何度も自分で確認させながら丁寧に書くことを要求している。一方、実習計画書は、自身の実習目的やねらい、事前計画を整理する意味でも重要な活動となる。漠然としていた実習のイメージを、もう一度、自分の中に明確に位置づけていくことが求められる。

下書き (例) 短期大学 実習生調書 (年 月 日現在)

児童養護施設 実習期間 2005年 2月 25日 ~ 3月 17日

氏名 貝本 学号 1985年 4月 23日生 (満 19歳)

専攻 児童福祉学 学年 1年

現在所 埼玉県北葛飾郡 電話 048-

年 月	学 校	年 月	学 歴
1998 3	千葉県野田市立 小学校		卒業
1998 4	千葉県野田市立 中学校		入学
2001 3	千葉県野田市立 中学校		卒業
2001 4	埼玉県立 高等学校		入学
2004 3	埼玉県立 高等学校		卒業
2004 4	短期大学		入学

現在に至る

実習・ボランティア・サークル等活動歴

年 月	内 容	日数
2002年 8月	保育所にてボランティア	7日
2004年 8月	保育園、学童の子どもたちと遊ぶボランティア	1日
2004年 10月	保育所にてボランティア	1日
2004年 11月	保育所にてボランティア	1日

教科履修状況

(教養課程) 科目	(専門課程) 科目
日本国憲法 フランス語I コンピュータ基礎演習I 現代社会を生きる(音楽)	音楽の基礎工 造形の基礎工 幼稚園教諭論 教育原理 養護原理 社会福祉... 児童福祉工 発達心理学 保育内容(健康)指導法

特技

書道(7段)	折り紙
ピアノ(4級)	歌
	ボール遊び
	バスケットボール

好きな学科

音楽の基礎工
生涯スポーツ
造形の基礎工

推薦 (希望理由等)

私は、講義で児童養護施設について学びました。そこでは、子ども保育士の使命を持ち、ストレートにあり、ぶつかりあっている姿を知ることができました。児童養護施設には、いろいろな家庭問題をかかえている子どもや、ずっと施設で生活している子どもたち、年齢を問わずに、子どもたち一人ひとりに寄り添う心が感じられます。実習を通して、先生方が接し方を学ばないと思いません。また、子どもの気持ちになって考え、理解してあげられるよう、努力したいと思っております。

図2 実習生調書 (例)

施設実習 計画書		施設種別 児童養護施設		施設名 少年の家		施設実習計画事項	
学務番号	071117	実習期間	2007年	月 日	曜日	目標	留意事項
氏名	静香 男・女		11月19日(月)~11月29日(木)	11月19日	月	子ども達の名前を覚える。 ・一日の流れを覚える。	11月18日の指示に従い、ホムスの実習開始。
①実習の目的 施設保育士が、入所している子ども達にとって、どんな存在でどのような支援活動を行っているのかを理解し、また、施設の目的・役割への理解を深め、働く意義について学び、自分が施設保育士に向いているのか、この仕事かしたいのかをみつけ、将来の仕事の選択に役立てる。				11月20日	火	指導員や保育士の仕事内容を知る。 ・子どもの生活を把握する。	労働体制を通して、生活規則の把握がある。
②貴施設での実習を希望した理由 私は、講義で児童養護施設について学びました。その中で、子ども達が色々な事情を抱えながら入所していることを理解し、そのうえで私たちに何が出来るかということ把握しながら、子ども達と支援していくことは、難しいことだと思いました。そこで今回、子ども達と接し、理解を深め、先生方から支援のあり方や方法を学びたいと思います。				11月21日	水	子ども達と関わるように積極的に話しかける。	自ら話しかけ、積極的に子ども達の輪に入る。
③実習における視点・課題 ・子ども達と積極的に関わり、子ども達の行動や発言を通して、子どもがどのような思いを抱いているのかを少しでも理解する。 ・一人ひとりの子ども達に応じた支援の方法や方法をどのようにしているのかを理解し、支援者への理解を深める。				11月22日	木	子ども達が何を伝えたいのかを理解する。	子どもの少しの変化にも細心の注意をはらう。
④事前学習の取組(内容) 児童養護施設に入所している子ども達は、虐待などの理由で施設生活をすることを、保育原理や養護原理の講義で学びました。それらの子ども達との関わり方を、子どもの立場に寄り添うがために、「きみの心のサポーター」という文献を参考にし、事前学習を深めておきたいと思います。				11月23日	金	実習中に生じた疑問、問題点を提起する。	少しのことで良いから疑問に思ったことは、積極的に質問する。
				11月24日	土	休み	前半を振り返り、疑問問題点を把握し、後半に向けての計画の参考にす。
				11月25日	日	一人ひとりの子ども達について理解する。	アドバイザーに関することについては、慎重に扱う。
				11月26日	月	指導員、保育士の役割についてさらに深く理解する。	日常生活以外の事についてさらに深く理解する。
				11月27日	火	子ども達とのコミュニケーションについての方法を考え、気持ちを推測する。	指導員や保育士の助言を参考にし、指導意識を出し始めようがける。
				11月28日	水	援助者としてのあり方を考える。	様々な人の意見を聞き、自分の考えの参考にす。
				11月29日	木	実習を振り返り、問題点を考察する。	実習テーマ、課題は達成できたが、反省会にて質問できる準備をす。

図3 実習計画書(例)

3-5 研究課題について

実習を行うにあたっては、はっきりとした目的意識をもって臨む必要性が出てくる。あらかじめ、学生自身に問題意識をもたすために、研究課題を課している。これにより、具体的な実践視点をもって実習を展開できることができる。テーマを設定するにあたっては、これまでのボランティア経験などを生かしながら、研究可能で具体的なテーマを設定していく。なお、実習終了後に、実習日誌の研究課題の箇所に結果と考察を記述し、最終的に施設に提出することとなる。

表4 2007年度 施設実習研究課題(テーマ)一覧表(一部抜粋)

生活面における援助と指導について
施設での散歩の目的とその効果について
各年齢段階の食事の仕方と介助法について
乳児院での食事におけるコミュニケーションについて
遊びの支援について
歯磨きの支援
施設における衛生面の配慮・留意点について
会話によるコミュニケーションに困難を持つ方の気持ちの理解について
余暇時間の過ごし方
日中活動の援助の仕方
利用者さんとの信頼関係を作るためのコミュニケーションの図り方について

保育者の子どもたちに対する言葉がけの工夫 保育者の児童への自立支援のあり方について 子ども同士のコミュニケーションのとり方 保育者と子どもの一日の会話～安心と信頼を与えるために～ 子ども一人ひとりが自分の大切さ、相手の大切さに気づく為に保育者ができる支援 子どもたちがルールや規則をどのように学んでいるか 個人の能力を伸ばす介助の仕方について 日中作業の支援のあり方について 子どもの躰について 施設と地域の交流について 乳児への沐浴介助について 幼児の寝かしつけ場面のあり方

18 年度 施設実習 研究課題

短期大学 こども学科	学籍番号	氏名
実習施設名	種別 知的障害児	実習期間 19年2月19日(月)～3月1日(木)

1 研究課題(テーマ)

施設での昔女歩の目的とその効果について

2 研究目的

昔女歩は利用者さんにとって、施設の外へ出てのびのびと体を動かす良い気分転換の機会であり、たくさん自然に角が取れ合うことのできる楽しい時間である。また、利用者さん同士や施設の先生方と、地域の方ともコミュニケーションを図る場でもあると思われる。そうした活動の背景にはどのような目的があり、どのような効果があるのか。その意図を理解し、そのための働きかけや、障害の度合いに適した援助の方法を自分自身の関わりの中に活かしたい。

よって、本研究では、施設における昔女歩の意義を明らかにし、活動に見られる利用者さんの反応を見て、支援の手立てを学びたいと考えている。

3 研究方法

- ① 施設のスケジュールでの昔女歩の組み込まれ方と、その活動内容について記しを録する。
- ② 実際の昔女歩の活動で利用者さんの行動を観察する。
- ③ 支援の方法について、先生方の働きかけや、利用者さんとのコミュニケーションのやり方を探り、障害に応じての支援の方法・気をつけることを学ぶ。
- ④ 活動後の利用者さんの様子について観察する。

図4 研究課題（例）

3.6 施設実習体験発表会

毎年6月に、「保育実践の基礎」という講義の中で、施設実習を体験した2年生による発表会を行っている。ここでのねらいは、実際に体験をしてきた先輩から具体的な話を聞くことにより、実習に対するイメージや心構えを持ってもらうことである。1年生は、実習はもちろんのこと、他の施設で1週間の泊まり込みをすること自体に不安を抱えている。また、実習プラス自身の生活も維持しながらの活動であるため、先輩方がどのような生活を送ってきたのかに非常に興味を持っている。この体験発表会後も、個々が、自分の実習する施設を経験した先輩に独自のアドバイスを何度も受けながら、実習に対する意識を高めていくことになる。

🐱♡ 育成園 ♡🐱

種別: 指定された障害者入所授産施設

入所者の方について♡ 精神障害、てんかん、統合失調症をもつ平均年齢50.4才の男女50名(男生30名、女生20名)の入所者の方々が職員の方の援助を受けながら園々の会員に応じて適材適所の部署につき、授産活動に取り組んでいる。

活動内容♡ 授産活動の援助

- 飼育科 比内地鶏の飼育、採卵、鶏舎の洗浄、除雪
- 農林科 草刈り、清掃物加工、木柱の飼育、除雪
- 倉庫科 肥料の袋詰め、ウェスカロ工 (毛織物)
- カロエ科 折り紙、おやつ製造、パン菓子の製造

その他♡ 入浴日 ~ 月・水・金曜日 ミニドリム・カラオケ・おやつ ~ 木曜日(夕食後)
 ドリム・カラオケ・おやつ ~ 土曜日(夕食後) *入浴日以外には希望によりシャワー浴ができる
 自治会活動・共同理実習・サークル活動 ~ 土曜日(夕食)

発想・アドバイス 実習の前に夏休みを利用してボランティアをさせて貰っていたため、利用者の方とコミュニケーションがとりやすかったです。(ほとんどの時間帯が利用者の方とコミュニケーションの時間帯なので、積極的な態度が求められると思います。最終日には利用者の方と一緒に泣いてしまうくらい楽しかったです。とても充実した10日間でした。

第二

園



矢口の障害者更生施設

入所者さんについて

矢口白芍障害、ダウン症、てんかん等、様々な障害をお持ちの方が生活しています。(ほとんどの方が自分のことは自分でできますが、車椅子をご利用している方もいます)

活動内容

農芸科、工業科、生活科、洗濯科があり、月曜日から金曜日まで作業中心。土日は余暇。実習生は利用者さんと一緒に作業をしたり、食事介助、歯みがき介助などをします。介助は同世代です。

日勤 AM8:00~PM5:00 *宿舎の日には
 早番 AM7:00~PM7:00 車食を拜くと
 遅番 AM11:00~PM8:00 良い!!
 宿舎 AM8:00~翌AM8:00

アドバイス・感想

夏休みにボランティアに行くことが施設の雰囲気がかつめて良いと思います。職員の方と利用者さんの関係がいつも良かったです。余暇の日曜日も系芸があるので、利用者さんとスグに仲良くなれます。ご飯の量が多かったですがとても貴重な経験になるので、がんばらせます。



図5 体験発表会資料

3.7 外部講師による講演

毎年、11~12月の時期に、「施設実習」事前学習の一環として、外部から講師を招いて90分程度の講演を行っている。施設の園長もしくは実習担当の先生を中心に話をさせていただきながら、具体的な実践例や施設の現状、取組、課題などについて話をさせていただいている。これにより、学生自身も施設の様子を把握でき、実習イメージを形成していくことができると考える。また、問

題意識を強め、実習に対する姿勢や心構えを再確認していく場ともなっている。なお、2007年度は、「知的障害者施設の現状と課題」というテーマで、実習担当主任の先生に講演を依頼した。内容としては、①福祉現場の実情、②障害者施設とは、③利用者との関わり、④実習生を受け入れる現場から望むこと、⑤まとめ（実習をどのような場としていきたいか）であった。実習生に対する期待と不安な思いを率直に述べていただきながら、この実習を学生自身の将来像にしっかりと位置づけてほしいという願いが強く込められた内容であった。学生の感想としては、「実習を安易に考えていた」「ただ、10日間辛抱すればよいという思いが変わった」「施設現場の厳しさが伝わってきた」「実習ですべきことは何なのかが理解できた」「これからの自分の生活にどのようにつなげていくかを考えさせられた」など、実習に対する意識の高まりが感じられる内容のものが多かった。今後も、外部との連携を図りながら、必要に応じて情報交換や問題提起をしていただく場を提供していかなくてはならない。

3・8 養成機関及び実習生に関する施設現場の問題意識

施設現場を訪問しながら、お互いにとって有益となる「施設実習」について、フィールドワークと聞き取り調査を行ってきた。ここで得られた情報は、事前学習や講義の中で随時取り上げながら、実習に対する意識づけを行っていかなくてはならない。

表5 聞き取り調査結果（一部抜粋）

No. 1	目的意識がはっきりと認められない実習生がいる。
No. 2	子どもたちの遊び相手レベルで実習が終了してしまうこともあり、こちらも、どのように指導していけばよいのか、その対応に苦慮している。
No. 3	積極的に利用者と関係を築こうと努力する姿勢が見られる学生とそうでない学生の差が大きい時がある。複数名実習生がいると、どうしても、そのような視点で学生を見てしまう。
No. 4	将来、うちの施設でやってもらいたいという学生さんがいた場合、大学側とどのような接点をもって打診していけばよいのだろうか？
No. 5	実習期間中に、先生方が巡回指導に来て下さるのはありがたいが、中には、学生のことをよく知らずに訪問してくる場合がある。こちらとしても大学での学生の様子を把握しておきたい場合があるので困る。
No. 6	もっと、事前に、実習前の心構えや留意すべき点を指導してほしい。子どもたちへの対応や指導技術的なものは私たちが指導をするべきだと考えている。
No. 7	掃除を依頼すると、嫌な表情をしたり、5分程度でざっと済まして平気な顔の学生がいる。
No. 8	自分たちが使用した宿泊部屋の整理、整頓ができない。
No. 9	自分から率先して学び取ろうとする姿勢にとぼしい
No. 10	何か問題が生じた場合に、柔軟に対応できる力を育ててほしいのだが…。
No. 11	実習期間が2月に集中しているため、依頼があっても、学生を受け入れることが難しい。大学も都合があると思うが、分散して実習を実施することはできないものだろうか？
No. 12	学生を見てみると、大学で一体どのような指導が行われているのか、疑問に思ってしまうことがある。

施設現場が抱えている問題意識は、実際に対話を通してでないとなかなか浮上してこない。担当教員は、たえず施設を訪問し、施設の状況や雰囲気把握していくとともに、現場の声に耳を傾けていく姿勢が求められる。「専門的なことも大切だが、それ以前に人として大切なことをもっと伝えてほしい」「マナーや言葉遣いなどを教えるべきだ」「施設の現状をもっと知ってもらい、

目的意識をはっきりともった学生を送ってほしい」などの実習生に対する要望が多いが、それに加えて、「適切な実習審査を事前に行ってから実習をやってほしい」「もっと現場に即した実践的な講義をしてほしい」「ボランティアの重要性を講義で伝えているのか」など、指導内容や方法についての意見もある。また、「実習時期を検討してほしい」「巡回指導の担当を同じ先生にしてほしい」「多くの実習生を抱えていて、十分な対応ができない」など、実習体制の問題に言及したものも多い。

一方、「この実習生にうちの職員として来てもらいたい」「将来、保育士としての素質が十分にあると思われる」「J短大の学生は積極的に行動する」などの評価も受ける。講義や演習などを通じて、「なぜ、実習に行くのか」「実習でどのようなことを学ぼうとしているのか」という「学ぶ姿勢」を学生に問いかけていくことが必要と考える。今後も、施設側と密に連携を図りながら、お互いにとって有益となる実習のあり方及び学生支援について検討していかなくてはならない。

4. 考 察

本研究では、保育士養成機関における「施設実習」について、主に、実習前の事前指導に重点をおいて検討を行ってきた。実習のカリキュラムや指導の流れ、方法についても、現場とやりとりを行いながら、パターンリズムに陥らない柔軟な指導体制の確立が必要である。また、指導者側にも、単に実習指導の流れに乗って事前指導を行うだけではなく、より現場を意識した課題設定や講義、演習のあり方を吟味していくことが求められる。

今後も、実習受け入れ側と積極的に関与しながら、養成機関に求められている実習指導とは一体何なのかを吟味し、お互いにとって意義のある実習のあり方について検討を行わなくてはならない。前述したように、実習施設からの声として、「目的意識をはっきりと持った学生を育ててほしい」「主体性のある学生に来てほしい」「どうして実習に来たのか疑問に感じる学生が増えている」「日誌が十分に書けない」などの共通した意見が聞かれている。一方で、「福祉施設でぜひ働いてほしい学生だ」「自分から進んで子どもたちの懐に飛び込んでいく気概が感じられる」「多くのことを学びとろうとする姿勢が見られる」「これから先、必ずやリーダー的な存在になる資質があるように思う」「いい学生を実習に送り込んでいただき感謝している」などの声もある。

近年、盛んに言われている学生の資質低下についても、その傾向を真摯に受け止めながらも、高い素養や資質、行動力を伸ばそうとしている学生も数多く存在しているということを見込んで、学生一人ひとりの状態やニーズを把握した、粘り強い指導の必要性があると考えられる。学生を受け入れた側の責任は重大であり、早い段階から卒業後の進路を見据えた指導を行わなくてはならないだろう。

5. 今後の課題

今回は、「施設実習」における事前学習を中心として検討を行い、保育士養成機関の具体的な取組を基盤としながら、「施設実習」の問題について詳述していった。今後も、フィールドワークを主体として、現場の声を浮上させていくとともに、他大学の実践や動向も把握しながら、「施設実

習」の実際と事前事後指導、事例研究などを通して、より詳細に、「施設実習」のあり方についての問題提起と具体的な手立てを示していかなくてはならない。また、保育士養成機関と受け入れ施設側との認識のずれや連携支援などについても調査を行い、お互いにとって有意義な「施設実習」のあり方を検討していくために、「実習の質」に着目した研究を行っていかなくてはならない。

補足資料（施設実習のための準備・まとめの進め方）

準備するもの・準備内容・まとめなど	終了日
1) 実習用ファイルの準備	
2) 実習生調書 実習生調書の写真準備 2 枚 ----- 実習生調書下書きの個別チェックを受ける ----- 実習生調書を清書し、2部コピーする ----- 実習生調書（清書1部+コピー1部）提出	
3) 研究課題 ----- 研究課題下書きの個別チェックを受ける ----- 研究課題を清書し、2部コピーする ----- 研究課題（清書1部+コピー1部）提出	
4) 施設とのオリエンテーション 施設に電話をしてオリエンテーションの日程を決める。 ----- オリエンテーションで事前の準備などメモを取ってくる	
5) 実習日誌 実習日誌の表紙記入 ----- 実習日誌に透明カバーをする ----- オリエンテーションの頁に記入 ----- 実習日誌完成・提出（実習終了後2日以内必ず持参すること） ----- 実習先に実習日誌を受け取りに行く（いつ何えぼよいか確認） ----- 短大担当者に実習日誌を提出（ / ）	
6) 巡視関係 ----- 巡視をしてくださる教員に地図を持参してご挨拶する。 ----- 実習終了後、巡視して下さった教員にお礼状を出す	
7) 健康診断・検便 ----- 学生課に健康診断書の申請（何ヶ月前のものか施設からの指示に注意） ----- 検便用紙記入・容器受け取り・検便提出（実習2週間前） ----- ※検便一週間前より生もの摂取禁止 ----- 検便結果受け取る ★陽性の者は実習担当者と相談	
準備するもの・準備内容・まとめなど	終了日
8) 実習中の遅刻・欠席 ----- 遅刻・欠席の事態が起きたときは、至急実習先担当者にきちんと連絡をしたあと、短大実習担当教員に必ず連絡を入れ、延期等、その後の対応は支持を仰ぐ。	
9) 実習のまとめと反省 ----- 実習のまとめ提出（ / ）個別の面接で評価表をみる ----- 個別の面接で評価表をみる	
10) 施設に実習終了後お礼状を出す	
11) その他 ----- 傷害保険用地図を提出（ ）	

文 献

- 安部 孝・石山貴章（2008）保育実践力の育成に関する考察Ⅰ，埼玉純真短期大学研究紀要，第1号，p3-8.
- 安藤健一（2007）保育士養成施設実習に関する一考察—学生の実習アンケートから—，清泉女学院団旗大学研究紀要，第26号，p47-56.
- 石山貴章・安部 孝・田中 誠（2008）短期大学生の「自閉症」に関する認識，埼玉純真短期大学研究紀要，第1号，p9-18.
- 内山元夫・岡本幹彦・神戸賢次 [編]（2003）「福祉施設実習ハンドブック」，みらい.
- 加藤佐知子・木内英実・小林紀子（2008）保育者及び子どもの視点を獲得する能力とその育ち，小田原女子短期大学研究紀要，第38号，p95-105.
- 金子恵美・藤井和枝（1998）保育実習の事前体験学習としてのボランティア活動，埼玉純真女子短期大学研究紀要，第14号，p1-43.
- 川島恵美・川本健太郎・藤之原 綾・峰島里奈（2007）生活施設実習過程における実習生のモチベーション変動及び影響を与える要因—児童養護施設実習を経験した実習生の記録から—，関西学院大学社会学部紀要，第103号，p47-58.
- 小林宏己（2005）教育実習の評価に関する主観性の問題，東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，第1集，p97-105.
- 坂本真一・須藤康恵（2007）保育実習（施設実習）における学生の自己評価について，青森中央短期大学研究紀要（20），p19-28.
- 杉村伸一郎・朴 信永・若林紀乃（2008）保育者省察尺度に関する探索的研究(1)，日本発達心理学会，第19回大会論文集，p441.
- 藤 京子・木村たき子（2008）大学生のEQとCB-Rの関連性—「施設実習事前指導」に活用するために—，千葉敬愛短期大学紀要，30，p73-81.
- 増田公男・宮沢秀次・木本有香（2008）保育者養成課程大学生の保育観と子ども観の縦断的研究，日本発達心理学会，第19回大会論文集，p444.
- 松井剛太（2007）発達障害のある幼児の理解と支援を促す保育カンファレンス—フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）の実施から—，発達障害研究，第29号，第3号，p185-192.
- 宮崎隆穂・吉川明守・宮越敏夫（2008）保育系短大生における施設実習後の施設イメージの変化，新潟青陵大学短期大学部研究報告，第38号，p175-181.
- 山口直範（2007）養護施設実習における短大生の心的発達効果，岡山短期大学紀要，30，p79-82.